

中国語形容詞“快”を用いた命令表現の考察

— 日本語の形容詞命令文と比較した場合 —

大 瀧 幸 子

1. はじめに

大瀧幸子 2005a 「命令表現内における文法構造の役割分担—日本語形容詞の連用修飾と比較した場合」『金沢大学中国語学中国文学教室紀要第8輯』（以下、前稿とする）では、日本語の形容詞を含む命令構文型<1><2><3>を次のように区別した。

【前稿の表1】修飾項を形容詞とする連用修飾統合型<Ⅰ><Ⅱ><Ⅲ>

非修飾項	<Ⅰ>動作情報＝ 関連情報	<Ⅱ>動作情報＝ 情報指定	<Ⅲ>動作情報＝ 意義素指定
	ズームイン先	ゼロ	代動詞「シロ」
変化：速度（流相） （平相）	速く速く！	速くシロ！	速く歩け！速く回せ！
	速く速く！	速くシロ！	速く始めろ！
態度：弱度（流相） （平相）	優しく優しく！	? 文体の共起制限	優しくなせろ！
	優しく優しく！	? 文体の共起制限	優しく話しかけろ！
出力：強度（流相）	強く強く！	? 過度の曖昧さ	強く押せ！
：大きさ／小ささ 動線（流相） 形状（異相）	大きく大きく！	大きくシロ！	大きく／小さく回れ！ （ダンス集団レッスン）
	小さく小さく！		大きく／小さく作れ！
：長さ／短さ 時間経過（流相） 形状（異相）	長く長く！	長く／短くシロ！	長く伸ばして！短く切っ て！（歌のレッスン）
	短く短く！		長く伸ばせ！短く切れ！ （麺打ち）

日本語形容詞には動詞の命令形に相当する活用形がなく、すべて連用形を用いた命令表現が行われる。その日本語形容詞と動詞とで構成される連用修飾統合型の統合意義特徴を前稿では「ズームイン」という現象素操作方法（国広哲弥が提案した、意義素と外界の間に介在する現象素の概念¹）を援用）として記述した。

【形容詞と動詞で構成する連用修飾統合型の共通統合意義特徴】（前稿 p14）

形容詞の語義が想起する現象素（形容詞現象素）は、動詞が想起する現象素（動詞現象素）

のなかの流相または異相にズームインして、二重の現象素焦点を作る。

以下、この統合意義特徴の規定で用い、また本稿でも用いる概念を説明する。

(1) 形容詞分類について

形容詞が感情形容詞の場合は、常に「有意思の生命体についての情報が認知焦点に求められる」という示差的特徴があるため、他の形容詞と同一には扱えない。統合型内で共起する言語形式にその語義的意義特徴が存在しない場合には、関連情報（言語情報と関連付けられた言語外情報²）を得て認知焦点を補填するために二層以上の統合型群を作る必要が生じる。³ 本稿で考察対象とする中国語形容詞は、計量・形状・動作の様態（主に出力）の3種類に限る。なお、日本語の形容動詞終止形「～～だ」を「～～に／ナレ」（連用形）または「～～」（語幹）へと変形するものと捉え、前稿ではとりあげなかった。

(2) ズームインとズームアウト（＝ズームインの逆方向の操作）⁴

単語と対応する静的体系をつくる意義素コードが想起させる情報＝現象素⁵から、現象素の情報を統合型特徴というコードによって操作して現象素枠を構成し、さらに現象素枠から表現したいことを伝達し終えるために必須の情報を加えた構文素の構成へと向かう情報操作、すなわち「表現の具体化」へ向かう操作を「情報のズームイン」と名づけた。

2-1：第一人称者がある現象素へ他の現象素を統合意義特徴にそってズームインする。

第一人称者表現水準における現象素構成方法である。ズームイン先が一方の現象素に含まれる認知焦点（格または格的要素）であった場合と、ズームイン後にそこに新たに現象素焦点（例えば「表1」流相の修飾）ができる場合とがある。また、いずれの場合も、そのズームイン後の現象素枠に新たな言語情報を別個に加えて、他の現象素（枠）との関係を変化させる場合（「叙述」と呼ぶ）と、既存の現象素に重複してほかの現象素との相互関係に重大な影響を与えない場合（「詳述」と呼ぶ）がある。

2-2：表現者が現象素枠へ状況認識に関する情報をズームインさせ構文素を完成する。

第一人称者表現水準から文の成立方向（表現者表現水準）へ移行していく場合、その現象素枠のなかへ言語形式や言語外情報を通して、表現者が「出来事と最も深い関係を結ぶ Time（叙述時点）Place（叙述地点）」と認めた情報が取り込まれる。本来言語外情報に属する「話し手自身の出来事との関わり」なども、構文素を完成する表現者が言語形式を通して表現することができる（視点の位置や移動、時の流れにおける存在など）。

2-3：構文素枠内に話し手が発話場面の関連情報（目の前の聞き手に関する情報）や、単なる言語外情報（話し手の心の内言文脈など）をズームインさせて発話素を構成する。

表現素枠から発話素枠へ加えられていく情報は、すべて言語外情報（関連情報<話し手と聞き手が共有していることが明らか>としての言語外情報・非関連情報としての言語外情報をとともに含む）であり、言語形式による言語情報（文音調、強調・対比口調は除外）は加えられない⁶。

2. 形容詞命令表現の定義

本稿では、前稿でたてた命令表現の定義を踏襲する。

「構文を構築する表現者は不定人称者、第一人称者と比べて、より具体的な情報を認知でき、「みずからの表現したい内容（表現意図）を自覚」するとともに、「表現意図が伝わるように言い定める（述定する）人格」である。この表現者の定義に基づき、本稿では「命令表現」を「表現者が『自分の思う通りに発話場面の状況を変化させたい、という意識』（表現意図）を自覚し、それを言い定めよう（述定）とする構文」と定義する。」（p13）

このように命令表現を叙述内容に関する一定の特徴を有する構文として定義つける以上、単文内の述語の位置において動詞と形容詞が担う統合意義特徴の役割（現象素枠構成）の違いについて一瞥する必要がある。動詞は発話行為の方法や状況を変化させようとする表現意図のあり方を意義素内の語義的意義特徴「有意思」とともに言語情報化できるが、形容詞は日本語でも中国語でも辞書的意味として「意識的行為」や「時の流れと平行して生じる変化」を表す語義特徴を有してはいない。したがって、単独で発話された場合、行為指示の表現意図や命令の伝達意図は表現できない。しかし、行為指示や命令の言語形式を使わない場合でも、「発話場面の状態（一時的に定着をみている状況）」を変化させたいという欲求は、内言でない限り、人間の発話行為そのものに普遍的に備わっている。そこで、日本語や中国語では、表現者水準（表現者は「人間の人格における普遍的な傾向」を備える）において、動詞と形容詞を統合させる現象素操作を通して「状況を変化させる」ための言語表現を作り出す方策がたてられている。

日本語形容詞の場合は前稿で分析した如く、動詞と最小統合型（連用修飾統合型）内で結びつき、動詞の意義素が想起する現象素内のアクティオンサルト（aktionsart）の一部（流相または異相）にズームインして新たな現象素焦点を作ることによって「新たな計量・形状・様態の出現を示す」統合意義特徴を表現している。そして（1）形容詞の連用活用形を用いることによって統合型の被修飾語の位置が動詞によって補填されることを指定する、（2）被修飾語の位置を占めた動詞は命令活用形を用いる、という二つの方策が実行されることによって、「形容詞が表す状況」を成立させようとする表現者の意識を述定する構文が成立する。すなわち表現者水準内で「表現者が『相手の動作行為に伴って軽量・形状・様態を変化させる』という行為指示を表現意図としていること」が表現される。また、動詞を補填せず形容詞連用活用形のみを用いる場合も、「（言語外情報や言語文脈で指定されている動作行為に対して）新たな計量・形状・様態の出現を詳述する」統合意義特徴があらわされることにより、結果として「その出現への注目を引く＝反応させようとする」表現意図が表現されることになる。⁷

一方、中国語形容詞には統合型内では比較を表すが、単独で用いられた場合には動詞と統合することを必要とせずに、「表現者が『相手の動作行為に伴って軽量・形状・様態を変化させる』という行為指示を表現意図としている」と相手に理解させる述語（程度）補

語統合型が存在する。すなわち、「形容詞＋“一点”」である。本稿では中国語形容詞“快”「速い」に焦点をあてつつ、形容詞の文法的特徴、統合型の統合意義特徴、および命令文の成立要件について、中国語と日本語の異同を明らかにする。また、“快”の語義「スピード」に関連する「時間と距離」の認知に関して、アスペクト助詞を通じた分析を加える。

3. 中国語形容詞の単独形式による命令表現

3-1. “快！快！”と“真快！”

日本語の形容詞と中国語の形容詞の述語としての構文素操作が大きく異なることを示す用法の一つが一語文の伝達内容の違いである。中国語には活用形が存在しないので、形容詞が単独で発語の位置で用いられると、その意味は日本人の母語感覚からいえば終止形相当であろうと予想してしまう。例えば、中国語の“快”は辞書的意味として「変化（のスピード）が速い」と記述されているので、その単純な繰り返し表現は、「速い、速い」という日本語での感嘆表現に相当すると思われやすい。

しかし、中国語の“快！快！”は「速く、速く」という催促を表す命令表現である。日本語の「速い、速い」のような感嘆の意味を表現することは絶対がない、という。一語文の“快！”も極めてゾンザイな催促の表現であり、“快！快！”と文体差のみを有する表現として考察対象から除くが、同時に本稿では“快！”を動詞一語文とする見解には同意しない（後述）。また、“快！”を感嘆表現⁸とするためには、副詞をつけて“真快！”“好快啊！”“太快啦！”という統合を作ったり、程度補語をつけて“快极了！”とせねばならないことから、“快”は日本語の「速い！」とは意味が異なるとしか考えられない。

本項では中国語“快”と日本語「速い」との一語文としての用法の違いから中国語形容詞と日本語形容詞が使われる時の統合意義の違いや文音調の意味の違いについて考察する。

“快”などの単音節の判断・属性形容詞を述語に使い単文を終止させる形式についてはスクールグラマーでも記述されてきたように通常、程度副詞などを前置して連用修飾統合をつくり複音節以上の統合形式にする必要がある。“很”は最も使用頻度の高い程度副詞であり、中国語単音節形容詞の終止形構成要素（“很快”が「速い」に相当。）として扱うことにする。しかし、“很”＋形容詞の単語連結はいかなる場面を想定しても、まず感嘆文の表現にはならない点で、日本語形容詞の終止形と異なっている。

また、この“很”は、主語述語統合型形容詞が連体修飾語成分になる場合も修飾統合型構成の必要形式として形容詞と統合する。例えば「速い速度」は“快的速度”ではなく“很快的速度”、「白い手」は“白的手”ではなく“很白的手”として表現されねばならない。

以上の言語事実は、「文終止専用の言語形式は中国語には存在しないゆえに、叙述と陳述の区別は論じる必要がない⁹」とみなされがちである中国語においても、文終止の形式をとりあげて検討する必要があることを示している。そこで本稿では、まず感嘆表現と言明表現を区別するミニマルペアとして“真快”“很快”をとりあげて、それぞれが登録される

表現水準を、以下のリトマス形式との共起制限をもとに判定する。

- (1) 第一人称者水準に納まるかどうかの目安は「連体修飾語内で使用可能」。
- (2) 表現者水準に納まるかどうかの目安は「主語に第一人称以外の人称の使用可能。」
- (3) 発話者水準の情報であるかないかの目安は「文末語気助詞との共起制限の有無。」

本稿では、言語形式を登録する表現水準を、「その言語形式が使用できる最も下位の水準」とし、上位の表現水準で用いられる場合は現象素枠の構成方法を決める統合特徴や、言語外情報の取り込みによる構文素構成などが関わっているものとする。

考察結果からさきに述べるならば、“真”と“很”は、それぞれ表現者水準と第一人称者水準で登録される形式として区別される。

まず、“很”は上記の如く連体修飾統合型で用いられることから第一人称者水準の言語形式と決定される。

次に、副詞“真”の意義素は本稿の観点からは、『叙述内容が命題（主語 F (x) に対して述語が (x) となる関係にある）として成立する』ことを保証する機能として表現者水準に登録されるものとして記述される。例えば“他不是真高兴吧？”「彼は本当に喜んではいませんか（上昇文音調）？」では、“他真高兴。”「彼は本当に（＝“真的”）喜んでいる」が“不（是）～～吧”「～～ではないのでしょうか？」という発話者水準における疑問形式によって包み込まれている。その表現には、「表現者水準で命題の成立を保障する機能」が、発話者水準の発話者による保障（＝話し手の情報発信時の保障）とはレベルを異にしていることが端的に現れている。また更に“他很高兴/很高兴吧？”「彼は（とても）嬉しがっている/嬉しがっているのでしょうか？」が成立するのに対して、？“你/他真高兴吧？”？「あなたは/彼は本当に嬉しがっているのでしょうか？」が通常成立しにくい¹⁰ことは、“他高兴”という命題に対する「成立の保障」と、“吧”が表す「判断保留の語気（話し手の心理・認知の仕方）」と共起制限を起こすという言語事実を示している。すなわち“很”が統合型内の述語の判定に納まるのに対して、“真”には発話内で語気助詞すなわち発話者水準の語義特徴と共起制限を起こすのである。これはどう解釈されるべきであろうか？

本稿の表現水準の原則では、表現者水準で成立が確かめられた言語形式がそのまま他の言語形式が加わることなく発話者水準に上昇した時、「表現者が発話者と重なる」意味が生じるのであり、そこに語気助詞“吧”との共起制限が発生すると説明できる。

3-2. 中国語における文音調の位置づけ

では、中国語“很快”が登録されるのは第一人称者水準であるが、構文内で述語になる場合は表現者水準の言語形式とみなすことが肯定されたとして、なお考察すべき問題として、“很快”がなぜ感嘆文にならないか」が残る。中国語では文音調を加えたとしても“很快。”「速い。」が「速い！」という感嘆を表さないのである。命令の伝達意図を表す表現形式を考察する前に、この理由を説明せねばならない。“很”は代表的な程度副詞として扱わ

れながら、実は「どの程度」を表すのかについては、論考が少ない。感嘆文にならないということは、“很”が「たいした程度は表さない」ことに由来するのであろうか？

本項ではまず文音調の表す意味について、構文素の必須情報である表現意図と、発話素の必須情報となる伝達意図の差異を考察する。

動詞・形容詞が述語位置を占めた場合、日本語でも中国語でも主語述語統合型は他の統合型と異なり、ことさらに他の言語形式と統合しなくても第一人称者水準（リトマス形式の具体例は「～～のだから」「～～ことは」）から表現者水準（構文）へ、さらには発話者水準（発話文）へと移行するだけの言語外情報を取り込むことができる¹¹。すなわち主語述語統合型が登録される表現水準は第一人称者水準であるが、統合型のなかで唯一、「単独で表現者水準の構文特徴のいくつか（表現意図・相手・叙述時点／場面など）を言語外情報として取得できる統合特徴（「命題特徴」と呼ぶ）」を有する。また、形容詞が述語位置を占めた場合、表現者水準における5種類の表現意図のうち¹²、「言明」と「感情表現」を中和状態で担うと考えられる。

主語述語統合型（第一人称者水準）が構文（表現者水準）になったことを示す言語形式は、通常「文音調（イントネーション、高低アクセント、スピード、および前後のポーズなどの複合発声形式）」だとみなされてきた。特に日本語では文末の音調の違いが表現意図の違いを表すとされ、「上昇音調＝疑問・推量」「下降音調＝言明」「強調アクセント＝感嘆」という恰も固定した表現意図を表すように記述されることもあった。

しかしながら、表現水準は下位の水準であればあるほど言語情報としての体系化が進み発話場面での用法から抽象されてきた語義特徴・統合特徴と言語形式との対応関係が固定的である¹³。音調、口調、イントネーションなどと呼ばれる発声形式は、3種類以上のタイプが静的体系を構成することはない¹⁴し、計測された音形の有意義な違いは相対的な波形の差異であって、人間の音声として絶対的音値を指定することはできず、個人差が大きい。また、省略表現すなわち統合型の項目が補填されていない発話についても母語話者間では「発話文が完了したこと（＝発話者が言葉を続ける意図がないこと）」が伝達できる。

そこで、本稿の観点から考察するならば、文音調と呼び習わされてきた音調が登録されるべき表現水準は「表現者水準ではなく発話者水準」であり、文音調は、構文を区切る音調ではなく発話文を区切る音調だということになる。（中国語の文音調も同様に解釈する）

本稿の仮定では原則として、下位の表現水準で規定ずみの言語情報を覆すような情報を、上位の表現水準では付加することができない。表現水準が不定人称者水準から発話者水準へ上昇していくメカニズムは、起点となる現象素（枠）に存在している言語（外）情報が標的となる構文素（枠）へと写像されてその枠内の情報と共起可能な言語外情報が付加され、更にその構文素（枠）を起点スペースとして標的スペースである発話素（枠）へと写

像されて枠内の境界内に含まれうる発話場面での情報が付加されていくものだからである。標的となる上位のスペースのほうに、起点となるスペースよりも言語外情報が多く存在し、かつ言語情報でも付け加えられるものがある。しかし、下の表現水準から上位へと橋渡しされた情報が写像されていくときに、語義的呼応が成立する情報だけが取り込まれていく（活性化されていく）からである。

ただし、裏返した言い方をすれば、原則として上位の表現水準へ写像していくコネクタ情報は下位の表現水準で規定された統合意義や意義素内の統合特徴、語義的意義特徴の一部分を、共起不可能な情報として＜抑圧して表現させない＞¹⁵機能を発揮することがある。すなわち、現象素から現象素枠を構成する場合、内部の言語情報のうち現象素枠をつなげる場合に、焦点の位置の設定や前景となる情報と背景化されていく情報が統合特徴で定められるに伴い、複数の言語形式の意味のうちで呼応しあう意味が決定されて＜コネクタされて活性化する情報＞と抑圧されて発現しなくなる情報とが振り分けられるからである。また、構文素が構文枠を構成する場合も、同様に、接続のコネクタの設置方法¹⁶によって、言語形式に依拠した思考を進める方法が大きく左右されるのである。

さて、中国語の発話者水準の言語形式は本稿の観点にたてば、「文音調」と「語気助詞」の二つだけである。それらの意味である伝達意図は「話し手が聞き手に対して、言語情報と話し手自身への＜聞き手の関心の方向＞を誘導する合図」に限られる。大滝幸子 1979「中国語語気詞の意味記述（その1）」中国語学No226, では従来文音調を「述定¹⁷」を表す形式と捉え、上昇音調で「述定の不安定さ」が、下降音調で「述定の安定さ」が対比されているとした。仮にこの定義を表現水準に位置づけるならば、述定は「叙述内容に対して表現者がその情報の真理値を保障するかしないか」という表現者自信に関する情報を表現することになる。しかし、この音調はその形式が二種類にしか分類できない原始的記号であり、体系をなす言語形式とはみなせない。やはり発話者が操る形式とみなすのが妥当である。その結果、叙述対陳述の対比が表現者水準と発話者水準で行われることになり、国語学陳述論での述定と伝達はともに発話者水準に属すると捉えなおされることになる。

では発話者水準内の述定と伝達の相互関係はどのようにつけられるのか？本稿では「コミュニケーション原理によってつなげられる」と考える。すなわち「話し手が情報の真理値に自信がない（推量や疑問）→聞き手がその情報を確定するのに協力しようとする（あいづちや回答、情報補充）」という、疑問と回答の隣接ペアを構成する（構文群成立）交渉に類する行動が、発話場面で行われると考える。従来、伝達とは「発話者の聞き手に対する働きかけ」とされてきたが、本稿の表現水準では「意図」は4種類ありうる。本稿では、意義素内意味的事項の行為者（不定人称者水準）、動作主（第一人称者水準）、表現者（表現者水準）、発話者（発話者水準）という4種類の意図のうち、発話者水準での発話者の意図のみを伝達意図とする。この伝達意図は「一定の発話効果を希求している合図」

であり、その希求を表現するだけの行為価値があるかどうかは、聞き手との間でコミュニケーション原理が機能するかどうかという観点から話し手が判断する。述定と伝達はこの希求を「間接的に希求を表現し、発話効果を聞き手に任せる合図」であるか、「直接に希求を表現し、聞き手に発話効果実現を要請する合図」であるかの違いだと解釈する。そうすると、最も一般的な平叙文の区切りを示す下降文音調は、「話し手が伝えたい情報を伝え終わっている（聞き手は自由に反応して結構である）」という間接的合図として設定できる。

文音調が発話者水準に登録される言語形式であり、「話し手が情報の発信者として発話効果への希求を合図する形式」だと認められたものとする、日本語終止形では「速い。」と「速い！」は文音調「。」「！」の合図の違いがそのまま平叙発話と感嘆発話の区別を表現し分けている、と考えてよいことになる。すなわち、日本語において語気強化の音調「！」は「話し手自身がこういう原因で感動している」という合図を表せると考えられる。ところが、中国語で強調音調「！」が加えられたために“快！”が感嘆文ではなく「速く」という催促を表すとすれば、中国語では強調音調「！」が日本語のように感嘆発話を作るのではなく伝達意図「要求」を表現しているとする解釈もなりたちそうである。しかし、中国語の場合、回答を求める言語文脈がない場合は、弱弱しい口調を使っても“快”は、やはり催促の意味となる。“快”が命令文であることと語気強化の音調は無関係である。中国語における「！」は日本語の「！」と異なり、「話し手が有している情報はこれだけだぞ」という平叙発話のバリエーション（丁寧さを欠く合図）を表現するに過ぎない。

大滝幸子 1979¹⁸では、通常文音調と異なり上昇音調で「話し手自身の断定を聞き手にも押し付ける」a音調の存在を指摘したが、更に突き詰めていくと、「中国語で聞き手に向けての情報発信方法を表すのは文音調ではなく、a音調である」という結論が導けそうであるが、稿を改めて論じることにする。

3-3. 形容詞命令文“快！”と“快一点！”

では形容詞の意義素として記述すべき語義特徴に発話者水準の「聞き手への催促の合図」へのアクセス機能を採録し、“快不快？”と選択を求めてくる第一人称者水準の文脈意義や“很”という程度副詞との統合特徴が存在する場合には「催促」へのアクセス機能が抑圧される、と考えるべきであろうか。

結局、他の形容詞（特に計量形容詞において）が単独で命令的意味を表現することは“快”の反義語“慢”のほか、ごく少数しかないという言語事実¹⁹をもとに、“快”の意義素そのものに行為の催促につながる語義特徴があると考えねばならない。“快/慢”は「変化（のスピード）が速い/遅い」という辞書的意味をもっているが、その意味を意義素の内部構造²⁰に組み立て直すと【表1】のように記述できる。この不定人称者水準での意義素内構造は、表現者水準さらに発話者水準へと写像されていっても、文音調が加わるのみである以上変化することはない。

【表 1】

意味的事項		快	慢
判断対象格	変化する要因をもつモノ・出来事	(同一)	
判断基準	時間の経過と変化の過程との対比	(同一)	
判断結果	変化に時間がかかる、かからない	かかる時間が短い	かかる時間が長い

注：形容詞の意味的事項「○○格」は主語の位置を占める言語形式の意味を規定する

本稿の仮定から言えば、発話者水準で用いられた催促の意味を表現する“快！”は形容詞としての品詞特質（品詞に特有の意義素内構造）²¹を保持している以上形容詞とみなすしかない。そこで、【表 1】でしめした意義素を構成する語義特徴のどれが、構文内の言語情報や発話場面のどのような言語外情報と結びついて命令文としての効果を発揮するのかを説明できねばならない。

しかし、その前に、先行文献のなかで命令文“快！”を「形容詞が動詞化した用法」とみなす説と、副詞とみなす説とを検討しておく。

袁毓林 1993『現代漢語祈使句研究』（北京大学出版社）は命令を表す“快／慢”を動詞とみなしている（p159）。その理由は、（1）“快／慢”は通常の動詞が命令意図を表すことのできる統合形“你要+Verb”（君は～すべきだ）のなかで動詞の位置を占められる。（2）“你要+Verb”内での“快”は“赶快”「急いで（～する）」の意味であり、速度が速いという意味ではない。（3）“快读！”“快读。”は（文音調の違いを除けば）多義文である。（「急いで読め！」「スピードをあげて読む。」）

しかしこの3点を本稿では反対に、一語文“快！”が形容詞であるままの証拠の一部とみなし、次のように解釈する。

- （1）“快／慢”が行為指示の表現意図を表すのは、「動作行為を準備中、または進行中の相手」を「目の前の聞き手」とした場合に限られる。すなわち主語が“你(們)”に限られることは、「催促」が発話者水準で生じる意味であることを裏付けている。真に動詞であるならば、動作主が異なっても同じ意味を表せるはずである。
- （2）単音節形容詞の重畳型が連用修飾語の位置を占めて、単音節の裸の動詞を修飾する統合型から、動詞を補填しない連用修飾統合型が命令文を作れること。（“好好儿的（做）！”“丁寧に（作りなさい）！”“轻轻儿的（放）！”“そっと（置きなさい）！”）これらの形式が表す意味を動詞の意味とみなすことはできない。

本稿では先に一語文“快！”での“快”の意義素内構造（品詞特質）が形容詞であると指摘したが、その他に袁毓林 1993の挙げている（2）の表現が成立することを主な根拠として、“快！”を形容詞が連用修飾語の位置を占めた「連用修飾統合型の被修飾語位置未補填の形式」であると捉えることにする。

荒川清秀 1979「中国語における形容詞の命令文」『中国語学』226号では、“快！”と“快一点”とをこう区別している。「本項では単独で命令文になる“快”を副詞、“一点”のついた形を形容詞の命令文と考える。(P38)」確かに、日本語の連用修飾語が被修飾語の位置に動詞を補填しないまま命令の表現意図を表せることと対照して考えるならば、荒川論文の処理も妥当なものと考えられる。しかし、日本語でも形容詞連用活用形をもって形容詞の副詞化した形式という範疇整理は行われたことがない。本稿の観点から言っても、同じ意義素と同定できる形式が異なる統合型内の位置に置かれた場合、異なる統合特徴が加わりはしても、意義素内構造が変化したとはみなさない。また、“快”と比較されている“快一点”も同様に単独で命令文にもなれば、連用修飾語として“快一点走！”の命令文の一部となるが、語義そのものは「もっと速く～～」であって単独命令文の「もっと速く→急いで」と変わらない。“快一点”は統合型すなわち第一人称者水準に登録される形式であり、構文すなわち表現者水準に登録される形式ではない。荒川論文は「形容詞+“一点”という統合型が形容詞命令文定型だと指摘した嚆矢として価値あるものであるが、「形容詞が命令文になる場合には必ず“一点”を必要とし、“一点”なしで命令文になるものは、他に理由を求め、形容詞以外の品詞として処理しようとするわけである。」(p38)という方策は単語の意味と、その単語が含まれる構造全体の意味とを混同したきらいがある。意義素内構造の区別（統合型内で担う格や格的要素に関する語義特徴を含む）を品詞分類の根拠にする本稿の立場からは、単独発話“快！”として用いられても、“快一点！”として用いられても、不定人称者水準の単語“快”としての意義素内構造（品詞特質）に変動が認められない以上、ともに形容詞範疇の言語形式と判定する。

さてそこで、“快！”「速く！」「快一点！」「急いで！」は、連用修飾語の被修飾語項が動詞で補填されず省略されたまま発話された形式であり、第一人称者水準では連用修飾語統合型であることが認められる理由を改めて考察する。通常、話し手が項の一つを補填していない統合型の省略表現を用いて、文音調を重ねることで伝達意図を表そうとする場合、話し手は発話場面において<話し手と聞き手がコミュニケーションをとろうとする協調の原則²²>が特に強く働くだろうという状況認識をもっている。すなわち、「何らかの行為をしている最中の聞き手」は「スピードをあげて（何かを行う）」という統合形式を話し手が発話したことを、自分の行為のスピードと「関連性が深い」と受け取る傾向があること、すなわち、特に強調音調によって話し手から「スピードをあげて（～～）」と言いつた場合、その言語形式として省略されている（～～＝何かを行う）ことを「自分のしている行為と関連がある」と理解する、という協調の原則のもとで、省略表現による命令形式が成立する。つまり動詞の省略が、行為指示の発話効果（命令文の成立）を誘導しているのである。本稿では、この動詞の省略がもたらす命令文の成立メカニズムは、日本語の形容詞連用活用形だけの命令文にも同様に存在していると考えられる。そして、中国語形容詞のうち、“一点”を伴わずに命令文成立メカニズムで命令文となるのが“快”“慢（時代がかっ

たり、軍隊調であつたりするニュアンスが伴う)”のみであるのは、日本語に比べて、中国語では動詞が意義素内に有するアクションサルトの展開性（後述）が顕著であるためと解釈する。（以下、動詞分類の項で詳説する）

3-4. 第一人称者水準程度副詞“很”と“太”

では、形容詞と程度副詞“很”とはどのようにして現象素枠を構成するのか？次に、“很”の意味について考察する。

まず、“快”が一見、一語文としても使用できる場合があるので、構文の述語表現になるには“很快”という統合が必要かどうかを確認する。一語文として“快”が使用される場合、“快不快？”などの選択疑問文を先行文脈として必要とする。すなわち“快”は回答として「一項選択（選択項目が複数存在）」を求められた場合に限り、一語文として選択結果を表す叙述内容を表現できる。

表現水準を4段階に分ける観点からは、このように「ある構文が終止する成立条件に一定の言語文脈を必要とする」場合、その構文を表現者水準における複数の構文が複合した、構文群への登録形式とし、その想起する構文素も単独ではなく「構文素枠」とする。この規定に基づけば、一語文“快。”は表現意図を単独では規定できない言語形式とみなされ、構文の述語としての単独形式としても“快。”は考察対象から除外される。

では、(単音節)形容詞が構文内の述語になる場合、多くの程度表現が存在するにも関わらず“很快”という統合がなぜ恒常的に選択されるのか、“很”の第一人称者水準に登録されるべき（統合型の連用修飾項でのみ用いられるため不定人称者水準には登録できない）統合意義特徴はなにか。大滝幸子 1996²³では、こう規定した。

『【“很”+計量形容詞】の統合型において、「被修飾語となる計量形容詞の判断スケール（一定の方向へ動く）」が、文脈の中で判断基準とされていた数値を「分割基準」として、「被修飾語となる計量形容詞（AaまたはAb）²⁴の領域に固定された」²⁵と、第一人称者が判断を下す。』（アンダーラインは本稿での追加）

簡便に記述するならば、“很”は「計量に用いる判断スケールが固定されている」という弁別的特徴を有する。そして形容詞は“很”と現象素枠を構成するときそのベクトル値を消失する。張琪昀 2002<“太”“很”考辨>《漢語學習》第4期で列挙されている“很”についての8種類の共起制限は、この意義素の記述が妥当なものであることを裏付ける。本稿にとくに関係が深い共起制限はつぎの(1)～(3)である。<>でくくった二項は直接構成要素分析で最も下層に置かれた意味的関連性の深い統合形式である。

- (1) * “很” + <形容詞 + “一点/一些” >
- (2) “很” + <“有” + “一点/一些” > + 名詞 (“有” + 名詞 = 形容表現に限る)
- (3) * <“有” + “一点/一些” > + “很” + 心理動詞

張 2002 では『“太”は過分、“很”は充足』とされているが、それだけでは両者の用法

の違いを十分に説明できない』という問題提起からはじめて共起制限の例を列挙している。この(1)～(3)については「少量または不定量」を表す形式との統合において、“太”と“很”が正反対の統合機能を発揮するとしている。ただし、何故そのような共起制限が生じるかについては他の共起制限の例と同様、なにも分析を加えていない。

本稿では“很”の意義素記述にならない、“太”の意義素を次のように記述する。

『【“太”+計量形容詞】の統合型において、「被修飾語となる計量形容詞の判断スケール(一定の方向へ動く)」が、文脈の中で見出された「適正基準」を「被修飾語となる計量形容詞の方向へ超過し、かつその隔たりが大きい」と、第一人称者が判断を下す。』

(アンダーラインの言語外情報は表現者水準へアクセスして取り入れる場合もある)

簡便に記述するならば、“太”は「適正でない方向へ隔たっていくベクトル値がある」という弁別的特徴を有する。そこで、(1)(3)に“太”を入れた統合形式では、隔たるベクトル値の大小に関して(1)少し増える(3)ゼロではなくて大分ある、という語義呼応が成立するが、“很”では「一旦固定した判断スケール」を更に動かしたり、ゼロではないが少しはある、と判断を加えなおすことができないため、共起制限がおきて統合不成立になると解釈できる。(2)については、“很”の意義素は「“有一点”＝ゼロではなくてかなりある点」でスケールを固定することができるが、“太”では「隔たりが大きい」という語義特徴と共起制限がおきて統合不成立になると解釈できる。

ここで、本稿の“很”の意義素記述が是認されたものとする、“很快”を述語とする構文の表現意図は「(第一人称者水準ですでに確定されている)言明」と言えよう。この抽象性、客観性の高さが、“很快!”が感嘆発話になるのを妨げていると考えられる。すなわち、話し手が“很快!”「話し手はそう思っている」と強調文音調を被せた場合でも客観的意見表明の立場が抜けず、かつ聞き手への希求を示す合図にもなり得ないと解釈できる。

3-5. “計量形容詞+“一点!””と“計量形容詞+定量詞。”

中国語計量形容詞は陸俊明 1989(注17参照)で以下のように定義づけられ、複数の統合型のなかで他の形容詞とは異なる統合を示す語彙群とされている。

リトマス形式「隔たりの程度を表す具体的数値(定量数量詞)を後項とした統合型を構成する(具体的判断基準は文脈・発話場面で言語(外)情報として存在する)」

成員14組:すべて反義語関係にある

[形状] 大小(体積・面積)・長短・厚薄・粗細(太い細い)・寛窄(幅が広い狭い)
高矮(物体を上下に計った長さ)

[スペース] 高低/深淺(グラウンドから(上方向の/下方向の)トラジェクタまでの直線経路)・大小/寛窄(空間が広い狭い)

[距離時間] 遠近・晩早・快慢(一定時間(多くは一瞬)での移動距離の長さ)

[数値] 多少・重軽・貴賤(=便宜)(値段が高い安い)

計量形容詞の定義に用いる[形状]とは、「物体がどの方向で置かれても同一の物と認知できる物体の形」であり、[計測]とは「物体に対して、または参照地点とトラジェクタの間で決まった方向に当てられたスケールで図る数値」、[距離（視覚）、時間（記憶）]とは「二地点の間、或いは二時刻の間を結ぶ直線的経路（一次元）隔たり数値」を指す。

中国語計量形容詞と定量数量詞が組み合わさる統合形式は二種類ある。形容詞の前に定量数量詞が置かれた場合、例えば、“一米長”は「1メートルの長さ」という名詞として、動詞“有／是”の目的語の位置を占める。形容詞の後ろに定量数量詞が置かれた統合形式（「定量差比較」と名づける）場合、必ず特定された他の数値と比較して、「より～～」という隔たりの数量を表現する比較表現になる。例えば、“長一米”（（もう）1メートル（より）長い）“低5厘米”（（もう）5センチ（より）低い）“多一杯”（（もう）一杯多い）などである。この比較表現は要求や命令を表現することはできない。命令を表現する場合には、必ず動詞との統合が必要になる。例えば、“弄長一米！”（“弄”は代動詞；もう1メートル長くしろ！）“掛低5厘米！”（もう5センチ低くカケろ！）“喝多一杯”（もう一杯飲めよ！）など、「動詞＋＜計量形容詞＋定量数量詞＞の統合形式をつくる必要がある。すなわち、ちょうど日本語形容詞も連用活用形が動詞の命令形と統合してはじめて行動指示が表せるように、中国語の定量差比較は動詞と形容詞結果補語（定量数量詞含み）の統合型として、はじめて行動指示の表現意図が表せる。したがって、定量数量詞がついた比較表現が表す行動指示は結果補語としての統合特徴によって生み出されるものであり、個々の単語意義素の組み合わせからだけでは表現できないものである。

定量差比較に対し、＜計量形容詞＋不定量詞“一点”（少し）＞の統合形式（「不定量差比較」と名づける）では、動詞と統合しないまま行動指示の表現意図を表せる。それは何故であろうか？本稿では両者の行動指示を表わす方策が異なる原因を以下のように考える。

定量差比較では、隔たりの数値を定量表現するために、比較しあう複数のモノ（名詞）が想起する現象素枠の一方が、「判断基準」²⁶に指定される＜特定の数値情報＞を含んでいることが必要である。また、一旦特定の数値が指定されている状況を変化させるには、どうしても動作行為を加えて＜時の経過に伴う変化＞を生じさせるように指示せねばならず、そのために動作を指示する必要がある。

それに対して不定量差比較では隔たりの程度が不定でしか表現されていないので、判断基準として特定の数値を指定する必要がない。しかし、比較という統合特徴は何らかの判断基準の情報を必要とするので、動作が言語形式として指定されていない場合、最も取り入れやすい判断基準は、発話時点²⁷で比べられるモノやコトの状態（一定の数値ではあるが特定はされていない）であり、それが言語外情報として取り入れる。そのモノやコトの＜発話時点での状態を話し手が「旧態基準」つまりあるモノが時間とともに過ぎ去る状態として認知＞することで、「発話時点での状態より少し程度が高まった状態を指定する」という一連の思考を表現しようとするとき、状態を変化させるという行動指示の発話意図が

動詞抜き（アクションサルトの過程抜き）で表現できると考えられる。

この仮説は、不定量差比較であっても判断基準として発話時点の状態ではなく、叙述時点での状態をとりあげられている場合は命令表現にならないことで裏付けられる。例えば“長一点”は“今天校长讲得比昨天长一点。”「今日は校長が昨日より長く話した」という過去の状況の言明に使われる場合もある。単独の“長一点”が必ず発話場面での状態が判断基準になるのは、動作行為が発話場面の直示（deixis）情報としてなら取り入れずみとみなせるためである。＜直示情報があること＞を省略表現が伝達機能を発揮するための充分条件とみなすのはすでに定説である²⁸。例えば“長一点”は餃子を作る場面（動作は“擀（皮）”）や、麵をつくるために手で棒状の小麦粉を引っ張る場面（動作は“拉（面）”）で異なる動作動詞を直示情報として取り入れることができる。

そうすると、“早一点！”という命令表現が成立しない理由は本稿の仮説で説明できる。時刻の後先の隔たりは動作によって直接コントロールできないゆえに、判断基準が登録される表現水準は必ず叙述時点となるからである。例えば、病院の窓口などで「（今度は）もっと早く（来てください）ね。」という表現が行われたとき、実際は発話時点からの隔たりを表しているのではない。したがって中国語では“*下次你早一点来吧！／早一点！”は使えない。必ず動詞とともに“下次你来早一点（5分钟）！”“下次你要来得早一点（5分钟）！”と表現せねばならないのである。

不定量差比較が命令構文になるためには上記のような条件があるとすると、定量差比較統合形と不定差比較統合形とでその統合意義が変化する言語事実も説明できる。例えば、“快一点”“慢一点”は具体的な動作のスピードの程度を上げたり下げたりする“快／慢”の弁別的特徴が活性化されて、聞き手にコミュニケーション協調の原則によって命令という発話効果をあげることができる（再述）。しかし、具体的数値を補語とした“快／慢五分钟”ではスピードの計測値が人間の＜素の感覚＞で得られず、発話場面を判断基準とできない。その結果、特定の判断基準として一般的に特定できる時刻（定刻）を具体基準（言語外情報）として優先して取り入れ、「時計が定刻より進んでいる／遅れている」状態を表現することになる。²⁹

このように日本語形容詞では命令表現の成否と関わってこなかった、「もう少し」という不定量表現と「定量数量詞表現」の差異が中国語形容詞の命令表現の成否を分けるのは、中国語計量形容詞が日本語形容詞よりも判断スケールの流動性が強固であることから、その形容詞が表すベクトル値が流動的になり、同一の状況に対しても「比較のための判断基準を何にするか」によって表現できるスペース（＝現象素粋）が大きく異なってくるためと解釈できる。

4. “形容詞＋一点！”を含む連用修飾統合型の分析

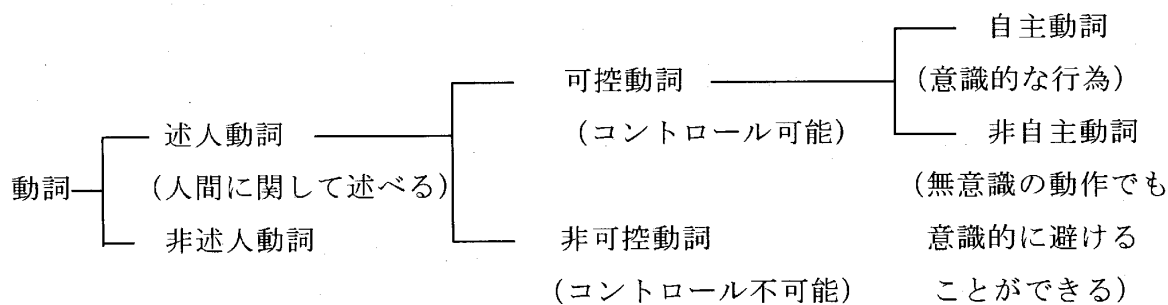
前項で中国語形容詞の意義素内構造と、判断スケールの流動性、および判断基準の言語

(外) 情報の取り込みについて考察を加え、日本語形容詞に存在しない語義的特徴および統合特徴について解釈した。本項では上記の諸特徴を用いて、動詞との統合形式を用いた命令表現の意味分析を進める。そこで、まず本稿で扱う動詞のタイプをどのように限定するかを定めてから、日本語動詞と中国語動詞との品詞特質の差異を明らかにするために、本稿で用いる動詞意義素内構造の記述方法を概観する。

4-1. 中国語動詞の意味分類

動詞分類のたて方は研究目的によって異なるのが当然であるが、中国語命令文研究の分野では袁毓林 1993 (既出) が徹底した語義中心の用例分析を行うための分類をたてている。その動詞分類として特徴的な点は、否定命令文の考察を通して、「コントロール可能動詞」のなかに「有意思動詞 (+自主)」と「無意識動詞 (-自主)」を区別したことにある。日常生活での語感では「コントロールができるのに無意識のままである」という状態は想像できないとおり、袁の動詞分類は否定命令表現のスコープが肯定命令表現より大きいこと (否定表現の現象素枠が肯定表現の現象素を内包する) を端的に表す具体例でもある。

【図1】『現代漢語祈使句研究』の動詞分類 (pp 28~33)



コントロール不可能動詞 = “長” “育つ” “属” “所属する” “姓” “(苗字~) という”
 意識的に避けることのできる無意識に成立する動作：禁止命令文にのみなれる動詞例
 = “忘” 忘れる、“怕” こわい、“嫌” きらう

本稿で扱う (形容詞と組み合わせる) 動詞は袁論文の分類では「+可控」「+自主」に限られ、動詞のなかのごく一部のグループでしかない。しかし、他の意味範疇の動詞は肯定命令文を作らないことから、本稿の考察対象からはずすことにする。

4-2. 動詞の意義素内構造

本稿が考察対象とする動詞グループ (「+可控」「+自主」) に対して意味分類を加える。

本稿では動詞現象素内のアクティオンサルト構成に基づいて動詞を3グループに分ける案【図2】を採用する³⁰。なぜならば、連用修飾統合型の動詞が補填されていない省略形式が命令文として用いられる場合、中国語では形容詞単独で命令の意味を表す単語がスピードに関する“快/慢”しかない原因として、中国語動詞のアクティオンサルトの展開性が強い (=ほとんどの動詞のアクティオンサルト内にアスペクトを区別する位置が含

まれている) ことを指摘したからである。以下、形容詞の語義特徴が連用修飾統合型において動詞の意義素が想起する現象素内アクツィオンサルトに言語情報としてどのように取り入れられていく(形容詞の側からはズームインする)か、を考察していくことにする。

動作動詞が想起する現象素の最大の特徴は、そのなかに「状況のなかで新たに生起する変化の過程」を含むことである。変化が生じる最初の始発点が必ずあることである。【図2】では、その後の変化の展開の様相によって以下の3種類の動詞現象素を区別して図示する。

(1) 瞬間動詞の現象素：瞬時に次の新しい安定をもたらす

リトマス形式：アスペクト助詞“了”をつけると Goal 到達を示す。

時間量を表す名詞と語気助詞“了”を付加して補語にすると、
当該動作が実現したあとの経過時間を表す。

(2) 無限動詞の現象素：現象素を嵌めて過程を終止するまで同一パターンの変化が続く。

リトマス形式：アスペクト助詞“了”をつけると Start をきったことを示す。

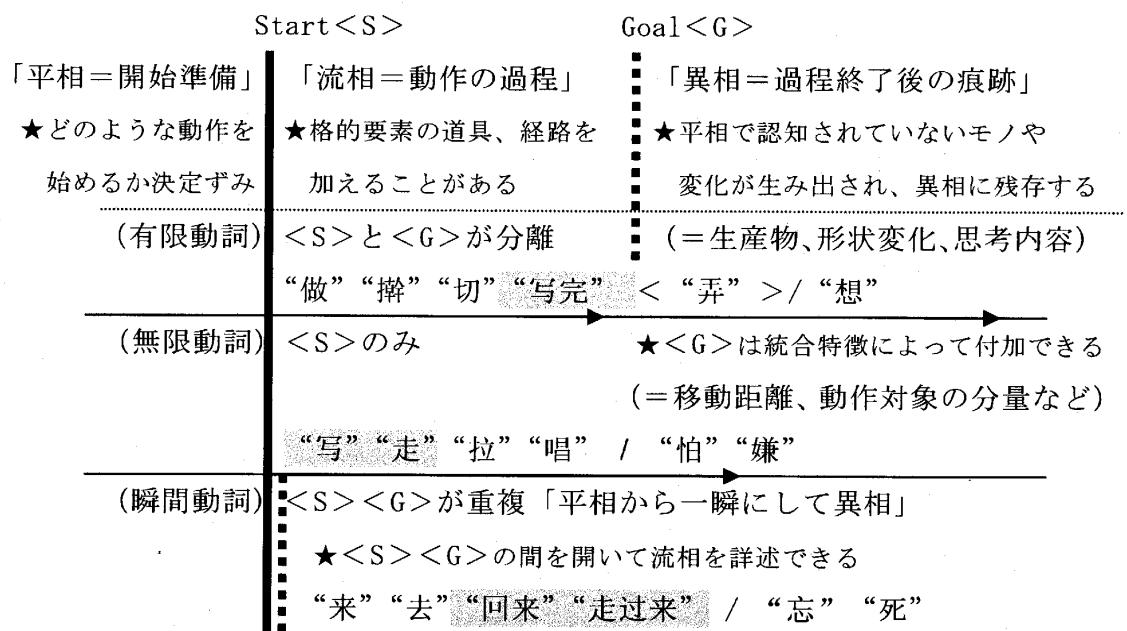
時間量を表す名詞と語気助詞“了”を付加して補語にすると、
当該動作が開始してから発話時点までの経過時間を表す。

(3) 有限動詞の現象素：変化過程の最後の終止点(=Goal) 到達後、予定調和としての新しい安定が生じる。

リトマス形式：形容詞“好”³¹とアスペクト助詞“了”をつけると、Goal到達を示す。(“完”と共起しても“好”と共起できない動詞が存在する)
ただし、目的語の位置に生産物を置く統合形式に限る。

また、有限動詞は流相を内包するので、無限動詞のリトマス形式をも充足する。

【図2】3種の動詞意味分類(有限動詞)(無限動詞)(瞬間動詞) / 右側=考察対象外



注：網掛けされた動詞は次項で【表3】において考察対象とする。

無限動詞“走”は方向動詞“过”の付加によって「流相の展開する様相（隔たりを詰める）」を獲得し、方向補語“来”の付加によって、出来事時点での第一人称者の存在地点を定める。視点の位置が確保されたことにより、³² 発話場面で直指可能な“走过来”の統合意義が成立する。

注：【表3】で示す「未発」は平相（その動作を開始することを前提にする）の局面にあること、「未到達」はGoalに到るまでの流相の過程にあることを示す。

ここで、この動詞の意味分類に関するリトマス形式として使用したアスペクト助詞“了”を表現水準のなかにもう位置づけるかについて触れておく。まず、現象素内のコトの変化過程と、発話時点などを基点として認知できる時の流れとは、表現水準を異にすること、アクションサルトは抽象的な事柄の変化全体（非一回性または語彙的）の内部に関わり、アスペクトは出来事が一回起きるその過程の内部に関わるという区別を明記しておきたい。すべてのコトの過程、時間の経過に沿って継続する変化は「認知する主体の視点の据え方」の違いによって捉えられる様相を異にする。表現水準を4段階にわけ、それぞれの認知主体の能力範囲を区別する本稿の考え方は、コトと時間に関し【表2】のように整理される。

【表2】コトの過程と時間の経緯を表す統合特徴³³

状況を捉える（認知の主体）スペース	平相・流相・異相「事柄」（現象素）	動態「出来事」（現象素枠）	時制「事実」（構文素（枠））	発見・確認「現実」（発話素（枠））
表現水準	不定人称者水準	第一人称者水準	表現者水準	発話者水準
視点が【流れ】を捉える方法	事点（Start と Goal）との対比	出来事時点における相との対比	叙述時点と出来事時点の対比	発話時点と叙述時点の対比
時間量・存在物・変化量の計測方法	意義素内構造のアクションサルト（非一回性）	アスペクト関連の出来事時点アクションサルト内へコネクト（一回性過程）	アスペクツァリティとして叙述時点の指定（time period）と出来事時点へコネクト	発話時点を中心とするテンスの想定（叙述時点と対比：未来、過去の可能世界構築）

本稿の意義素の定義では動詞はすべて動詞特質を有して不定人称者水準に属するが、「時間の経過を表す言語形式と統合できない複合動詞や述語補語統合」は第一人称者水準に登録される言語形式とする。その言語形式とその意味に関する理由は二つある。

- (1) 意味領域を異にするコトの過程と時間の経過は、重複する（コネクトする）ことはあっても共起制限を起こすことはない。共起制限は同一意味領域で生じる。
- (2) 異なる表現水準にある同一意味領域では、呼応関係が成立する場合（コネクタになる情報が見つけれられる）も、共起制限が生じる場合（反正する情報が複数の言語形式に含まれる）もある。同一表現水準・同一意味領域では原則共起制限が生じる。

従来、アクションサルトの Start または Goal（本稿でいう二つの「事点」）を表示する形式とされていたアスペクト助詞“了”は、本稿では、「第一人称者水準の出来事時点を、

不定人称者水準の事点にコネクトさせる」第一人称者水準に登録された言語形式とする。同様に、流相での動作の継続、異相での結果の持続を表現するとされていたアスペクト助詞“着”は、「出来事時点を不定人称者水準の流相と異相（本稿でいう二つの「局面」）にコネクトさせる」第一人称者水準に登録された言語形式である。したがって、この二つのアスペクト助詞が同一統合型（群）のなかで共起制限を受けるという言語事実は、（１）同じ第一人称者水準における（２）同一意味領域（アクションサルトへのコネクト指示）で、競合する情報を表すためと説明できる。

人間が認知する「コトの過程」「時の経過」はその抽象度において次元を異にする。世界の多くの言語で時の経過の表現が空間を表現する言語形式からの派生的意味で担われるということは、コトの経過がその発生場面の変化とともに主に視覚で認知されているからに他ならない。すなわちStartの状況と今現在の状況とを対比する認知が短期記憶の始動を促し、そこでコトの過程が体感される。コトの過程の幅が把握されると同時に初めて時の経過が感知されるからである。この「体感時間」は動物にも学習能力が備わっている以上当然存在しているはずである³⁴。しかし現在のところ、地球上の生命体で過ぎ去った事柄や未発の出来事を表現する記号を操れるのは人類だけといわれる能力はどうやって生じたのだろうか？

認知言語学では人間のカテゴリー化（categorization）の能力が言語運用を支えているとする言語観を支持する。人間が言語を習得段階では実存する認知主体は話し手のみであるが、徐々にカテゴリー化（発話の中から言語形式を抽象して取り出し、更に言語形式と繰り返され付加されている意味の間に対応関係を見出し、抽象的な言語形式と意味の対応関係を掴むこと）に成功して成熟した個人言語の運用能力を獲得する。このカテゴリー化の能力が行使されるときに、服部四郎 1963 の指摘した「発話からの抽象を経て文、統合型、単語」が成立する。一応の運用能力を獲得したあとは運用能力を支える４段階の認知の視点を駆使し、言語に拠る思考活動を行えるようになる。ただし、すべて一旦言語化が済んだ認識である以上、発話者水準の「現実の時間の流れを捉える」という視点に関しても、やはり人間の身体に備わった体感時間（現実に人間が認知している時間はこれしかないであろう）よりは、「言語による認知の習慣づけ³⁵」で枠付けられているものであり一段と形骸化していることは言うまでもない。この言語形式による一定の認知への枠付けは、メンタルスペースの構成へも影響を与える機能を発揮する。

4-3. “快”“很快”“快一点”を含む連用修飾統合型の統合意義

本項ではこれまでの仮定が中国語の言語事実をどこまで説明しうるかを検証するために、連用修飾統合型において“快”“很快”“快一点”が動詞と統合した場合にどのような意味の違いをみせるかを調査することにする。スピードはコトの変化過程と時間の経過とを統合した感覚として存在する。そこで、限られた紙幅のなかでできるだけ多くの言語事実を

考察対象とするために、組み合わせる動詞として動詞分類例【図2】のなかから、移動を表す意味領域と生産行為を表す意味領域とで、おのおの不定人称者水準と第一人称者水準に登録される動詞や動詞統合を取り上げた。連用修飾統合型の統合意義を調査するまえにまず、述語形式としてとりあげる動詞および動詞統合形の統合意義を、動詞特質を示す意義素内構造に依拠して記述する。

【表3 (A)】回来（“回”だけでは述語機能もない）→ 不定人称者水準

走过来（“走过+（場所名詞）”だけでは命令表現になれず“来”必要）→ 第一人称者水準

意味的事項	“回来” = (ゴール指定) 瞬間動詞 回来了多久? (帰ってから何時間?)	“走过来” = (“走”経過詳述) 瞬間動詞 * 走过来了多久? (時間の経過が問えない)
動作主 (格)	(人・動物) 有意識 = 平相に存在	(人・動物) 有意識 = 平相に存在
流相	規定なし	第一人称者の視点位置へ歩いて進む
流相両端の事点 < “了” を付加 >	不定人称者が認知焦点として指定した帰着点 (= 第一人称者の視点位置) が異相に位置する < “来” の後に置き Start 兼 Goal を表す >	第一人称者が指定した経過点が、流相へコネクトすると現象素焦点が成立する < “来” の後に置き Goal を表す > OR 【“来”の前に場所名詞を置き流相局面を表す】
異相 (格)	(人・動物) 帰着点に位置し続ける	規定なし

【表3 (B)】写（“写作业”は単独では命令表現にならない）→ 不定人称者水準

写完（“写完作业”が命令表現「書き終えろ！」になるには条件必要）→ 第一人称者水準

意味的事項	無限動詞 “写作业” ³⁶ 写了多久? (書き続けて何時間?)	有限 (複合) 動詞 “写完作业” * 写完了多久? (時間の経過が問えない)
動作主 (格)	(人・動物) 有意識 = 平相に存在	(人・動物) 有意識 = 平相に存在
流相	宿題をする	宿題をする
流相両端の事点 < “了” を付加 >	不定人称者が認知している事点 < “写” の後に置き Start を表す > < “写作业” の後に置き Goal を表す >	第一人称者が指定する出来事時点が Goal にコネクトする < “写完” の後に置き Goal を表す >
異相 (格)	(無規定) 想定された宿題が仮にある	(生産物) 完成した宿題が存在する

次に【表4】として、【表3】の述語と連用修飾語“快”“变快”“快一点”を含んだ最もシンプルな連用修飾統合形の統合意義を記述する。スピードに関してインフォーマントへ質問した形式は次のように規定してある。

- (1) 未発 = まだ動作を開始せず、Start を通過していない。(A) 出発前、(B) 書き始める前。平相の局面では「精神的準備」の意味が呼応。
- (2) 未達 = まだ動作を止めず、Goal へ到達していない。(A) 移動中、(B) 書いている最中。流相での経過を表現するので、「スピードアップ」の意味が呼応。

(3) 既達=発話時点で Goal を通過している。Goal=Start の場合も含む。

もはや動作は行われず、“很快”「速かった」という判定が可能になる。

(4) ●=命令表現、 ▲=回答文（発話の文としては言い切れない）

(5) ○=単独発話で平叙文として成立、×=文法的非文と感じられる

(6) ±=中和³⁷：文脈によってどちらかが選択される複数の語義特徴が生存する。

無規定とは異なり、選択肢となる語義特徴は特定されている。

なお、表内の日本語訳は後述の考察結果を反映した参考資料である。

【表4 (A)】 回来（瞬間動詞：Goal=Start）、走过来（瞬間<“走”経過残存>動詞）

() は形容詞を挿入する箇所を示す	快	很快	快一点
1 () 回来	●命令（未発） すぐ帰って来い	▲回答文（未発） すぐさま帰りますよ	●命令（未発） 急いで帰って来い
1' () 回来了	○（未発） すぐ帰ります	○（既達）あつという間に 帰って来ました	●(1a) 命令（未発） 急いで帰って来い
2 他() 回来	×	▲回答文（未発） すぐさま帰りますよ	×
2' 他() 回来了	○（未発） すぐ帰ります	○（既達）あつという間に 帰って来ました	×
1 () 走过来	●命令（未発） すぐこっちへ来い	▲回答文（未発） すぐさま来ますよ	●命令（未発） 急いでこっちへ来い
1' () 走过来了	○（未達） もうすぐやって来ます	○（未達±既達??） もう少しでやって来ます	●(1a) 命令（未発） 急いでこっちへ来い
2 他() 走过来	×	▲回答文（未発） すぐさま来ますよ	×
2' 他() 走过来了	○（未達） もうすぐやって来ます	○（未達±既達）あつ いう間にやって来ました	×

【表4 (B)】 写作业（無限動詞：裸名詞付）、写完作业（有限動詞：結果補語“完”付）

() は挿入する箇所を示す	快	很快	快一点
1 () 写作业	●命令（未発） すぐ宿題にとりかかれ	×	●命令（未発±未達） 急いで宿題にかかれ ±もっと速くやれ
1' () 写作业了	○(1e)（未発） ●(1a) 命令（未発）	×	●(1a) 命令 （未発±未達）
2 他() 写作业	×	×	×
2' 他() 写作业了	○（未発）すぐ宿題に とりかかります	×	×
1 () 写完作业	●命令（未達）速く宿 題をおえろ	▲回答文（未達） もう少しです	●命令（未達） もっとはやくやりおえろ
1' () 写完作业了	○（未達）もうすぐ宿 題をおえます	○（未達）もう少しで宿 題をおえます	×
2 他() 写完作业	×??	▲回答文（未達） もう少しです	×
2' 他() 写完作业了	○（未達）もうすぐ宿 題をおえます	○（未達）もう少しで宿 題をおえます	×

注：2ヶ所の網かけは、個人言語のゆれがはげしく、説明の整合性からも外れている。

【表4】では文末語気助詞“了le”の有無によって意味が変化している。本稿では文末語気助詞は発話者水準に登録され、表現者水準の叙述内容と双方でコネクトする情報により語義呼応を生じるとした。そこでまず、発話時点を叙述内容で表現された出来事時点とコネクトする機能を“了”の意義素として仮定したうえで、統合意義を考察する。

意味的事項(1) コネクトする情報＝発話時点から叙述時点(単一の動詞述語を含む構文ではアクションサルト内の事点と合致)へコネクトする機能を果たす

【表4】の用例では“了”により「発話時点→未知の出来事が事実化するはずの叙述時点→事柄が一回過程として展開する出来事時点」を事柄内アクションサルト内の事点(<S>か<G>かは動詞の種類で決まる)へコネクトする。

意味的事項(2) アクセス方法＝構文内の述語のありかたによって異なる。

(単一の動詞述語の場合) 動詞の類「瞬間」「無限」「有限」の違いがコネクトする事点の選択を原則として決定する。

意味的事項(3) 文脈意義との呼応＝時間とコトの過程を表す言語形式により異なる。

(連用修飾語“快”“很快”“快一点”が共用される場合、状況(発話時点から事点へコネクトする中間の表現水準:叙述時点)へのコネクトが決められる。

なお本稿では“la啦”を大滝1980での「a音調」³⁸に重複する語気詞の一つとみなし、時点と事点のコネクト機能とは無関係だと解釈する。なぜならば、「a音調」の判定基準である「上昇音調が自説の押し付けを表す」という意味のなかに位置づけられるからである。インフォーマントの語感では、聞き手への押し付け、要求の度合いは「a(上昇)→la→a(下降)」の順で弱くなる。

以上、助詞の表す意味を<単独構文>または<前置されている構文との構文群>のなかで認知意味論の視点から整理した結果を、叙述内容における背景情報として考慮しつつ、【表4】の統合意義の比較検討にはいる。

4-4. “快”“很快”“快一点”によって統合意義の差異が生じる原因

【表4】において統合意義の差異と共通点が生じる原因を事例ごとに検討していく。

(1) “快”“快一点”では動詞分類に関わらず、主語の有無によって2大別がつけられる。

1-1: 主語が無い場合、ともに動作を開始する効果を意図した命令表現になる。

1-2: ただし、文末語気助詞がつく場合、“快一点”は“la”がついて命令文になる。

“快”は“le”もつける。その場合、発話時点において叙述内容の実現へ迫りつつあることを示す平叙文(叙述内容は「未来の仮想」となり現実合致性が不問になる)にもなる。

1-3: 主語がある場合、“快一点”は非文法的表現になる。

1-4: 主語がある場合、“快”は“le”がつかなければ非文法的表現になる。“le”がついた場合の意味は、主語がない場合と同じである。

(2) “很快”は“快”“快一点”にみられる共通点をもたず、きわだった違いがある。

2-1：“很快”は無限動詞（B）とは共起できない。

2-2：瞬間動詞（A）と有限動詞（B）においては主語の有無に関わらず、“了 le”がない場合には独立構文をつくれない。

2-3：独立構文になった場合、“了 le”によるアクションサルトへのコネク트가（A）と（B）で異なる。（A=既達・一部未達）（B=未達）

上記の統合意義の差異が生じる原因は連用修飾統合型内の“快”“很快”“快一点”の意味の違いを、次のように解釈することによって説明がつく。

（1）“快”“快一点”は主語がない場合、すなわち「発話場面から主語を聞き手として特定する」場合に限り、聞き手がコミュニケーション協調の原理に常識的に従おうとする場合に限り、命令の発話効果が発話場面で生じる。述語動詞の種類によって平叙文の意味が変化することとあわせるならば、述語動詞を省略した統合形式を用いて「動作の開始へ向けてのベクトル値」を高めること、すなわち精神的スピードアップを表現することは効率のよい表現方法といえる。（1-1）

“快一点”は“快”の表現するベクトル値（本稿でのベクトル値は「ある事点に向けてコトが時間とともに変化する過程のめまぐるしさの体感」として認知され、一種の「体感時間の変種」を指すものとする。）の拡大をしめすものであり、ベクトル値の変化が統合型の意味の焦点である。この焦点としての独立性の強さは動詞アクションサルト内の現象素焦点としてほかの認知焦点の存在を排除し、その結果、連用修飾統合型全体を述語として主語（動詞現象素内の認知焦点になる）と命題表現を構成することを拒むと考えられる。

（1-3）

（2）“快”は語気助詞“了”と共用される時、発話者は「発話時点での固定された視点」にたって「コトの過程」をみる³⁹。その“了”は動詞述語形式が発話時点＝叙述時点＝出来事時点を事点へコネクつすることにより、はじめて“快”は事点へ迫るベクトル値を表現できる。迫るべき事点が指定されない場合、非文となる（1-4）。

また、動詞述語形式が流相を描写する場合、“了”はGoalへ発話時点をコネクつするので、“快”のベクトル値は未達（＝もうすぐ完了する）になり、流相の展開を表現していない場合はStartへコネクつされるためにベクトル値が未発（＝もうすぐ始める）になると解釈できる。（1-2）。

（3）“很快”が動詞を述語とする連用修飾統合型内で用いられるためには、“快”のベクトル性を消失させたスピードの判定を行う必要がある。スピードの判定は、コトの過程量と時の経過量（始まりと終わりの時点があってはじめて時間量が成立する）を対比することで行われるため、双方を表現する形式（アクションサルトのGoalを示す形式と二つの時刻を示す形式）と共用することが必要である。

コトの経過は原則不定人称者水準、第一人称者水準から表現することができ、時間量は

叙述時点を複数たてた表現者水準、発話時点と叙述時点または出来事時点とを対比させた発話者水準ではじめて表現可能となる。その双方を表現することを必要とする“很快”は、不定人称者水準で Goal をもたない無限動詞の裸形式とは共起制限を生じる。(2-1)

動詞が瞬間動詞である場合、“很快”がアクセスする事点が Start よりも Goal に焦点があり異相がクローズアップするために、“le”が登録された発話時点が Goal へと重ねられて「既達(あつという間に～～した)」の意味が生じる。なぜならば、Start のほうが過去の時点へと遡るからであり、それは 時を固定して過ぎ去ったコトをより明らかに認知する(過去を明確にマエに見る)発話者水準の視点が生み出されるからと考えられる。

一方、有限動詞(など)が流相を表現できて動詞アクセッションサルトが Start を切ったあとの過程を示しうる場合、“le”によって発話時点が同じ Goal に重ねられても「未達(もう少しで～～する)」の意味を表す。つまり、コトの過程としては異相よりも流相がクローズアップされる。それは、時間よりもコトに焦点があたる結果、事実の過程のなかで時間の流れとともにコトの変化を認知する(未来を変えられるものとしてマエに見る)表現者水準の視点が生み出されるからと考えられる。(2-3)

このように考えてくると、“le”は、発話者水準の発話時点から始まり、叙述時点、出来事時点、事点くすべての瞬間>にアクセスできるため、“很快”が述語形式へ求めるコネクタ情報をすべて提供できる形式として、“很快”が連用修飾語として用いられる場合、必須の言語形式になる、と解釈できるのである。(2-2)

5. おわりに

本稿は、意義素論における言語形式の抽象段階をつなぐ運用機能(いわゆる文法機能)として、現象素論を用いている。すなわち、4つの表現水準の間をコネクタ情報によるアクセスや、現象素のズームイン(本稿ではまだズームアウトは扱っていない)を通して行き来させる方策として現象素論(=文法)を捉えている。

(1)(実詞の場合)動詞、形容詞の現象素はそれぞれ認知焦点を有し、呼応する名詞(コネクタ情報をもつ)の現象素を認知焦点へズームインさせる。また修飾統合型は、認知焦点として名詞現象素による充足を予定しない現象素に対し、その一定の位置へ現象素焦点をつくってズームインする。ともに原則として現象素、構文素の枠を拡大させる。

(2)(虚詞の場合)名詞、動詞、形容詞の現象素内の一定位置へコネクタ情報を通してアクセスし、その情報にみずからの情報を重ねることで原則として表現水準を結びつける。

また、コトの過程と時間の経過を別次元の意味範疇として扱った解釈を行った。

いずれの考え方も、より説得力を増すためには網羅的な言語事実を考察することによって、その説明能力を実証せねばならず、本稿は考察事例の一つにすぎない。

本稿に取り入れて論じることのできなかつた言語事実の数々について、いずれ体系的な整理を加えた考察を公表する予定である。

注

- 1 国広哲弥 1994 「認知的多義論—現象素の提唱」『言語研究』日本言語学会 pp22-43
 2 関連情報となる言語外情報は、言語情報との類似性、話し手と聞き手の共有可能性に基づいて、少なくとも3種類のグループに分けることができる。

- (1) 先行文脈＝話し手と聞き手が同一の言語情報として復元（言語化）可能な情報
 （「ソウ言っただろう、ソウ聞いただけだろう」など、反復による確認が可能）
 (2) 共有知識＝話し手と聞き手が経験を通して共有している可能性が高い知識
 （「アレ、アノこと、コウだった」など、言語による説明が可能）
 (3) 現場知覚＝話し手と聞き手が発話場面を通して同時に経験可能な知覚
 （＜現場指示＞できる情報について視覚・聴覚など五感による受容が可能）

言語外情報のすべてが関連情報としての条件を備えているわけではない。「単なる言語外情報」は話し手、聞き手、そして各表現水準で人格を仮託された存在（表現者、第一人称者、不定人称者）のおのおのの視点で個別に捉えられる。

3 例えば、[嬉しく拝見しました。]という単文が想起する構文素の情報構造は次のように分析できる。[嬉しく][拝見しました]という二つの項からなる統合型群だけでは、[嬉しい]の経験者格と格的要素である原因格、[読む]の動作主格と動作対象格が想起する合計4つの認知焦点を補填できる言語情報をすべて揃えることはできない。そこで現象素内の認知焦点をそろえた現象素枠すなわち構文素（命題が想起する）を完成させるために、さらに統合型群を拡大する必要が生じる。

まず、感情形容詞を修飾語に用いた連用修飾統合型には経験者格と動作主格を補填する人格は同一でなければならない、とする示差的特徴が認められる。日本語ではく言語形式で補填されていない経験者格と動作主格は通常[私（が）]であるに違いない、と関連情報取り込みの習慣に基づき表現される。次に、日本語の母語話者であるならば、[嬉しく拝見しました。]の前に[お便り（を）]などの言語情報を一つ関連づけることより、原因格と動作対象格を補填することが了解される。つまり＜嬉しくさせる＞原因格も兼ねる[お便り]であるならば、＜話し手が相手に対して好意を抱いた＞ことを表現することになる。このように、ある統合型群が言語形式によって充足されていない、すなわち言語情報が欠けているにも関わらず、正常な母語話者間で＜関連情報により統合型群が完成される＞という言語事実があることは、話し手と聞き手の間で＜言語外情報の関連づけ＞に、同様の方式が存在していることを裏付けると同時に、関連情報の取り込みに統合特徴が用いられていることを証拠だてている。

4 通常は情報をズームインさせる情報スペース（現象素（枠）・構文素・さらに発話素）のなかの情報管理を委託された人格者が存在し、言語（外）情報を取り入れる。その取り入れ方は、メンタルスペース理論におけるコネクタに類似した「一定の操作手順」（例えば第一人称者表現水準における統合意義特徴）にしたがう。また、情報の取り入れ先すなわちズームインしてくる情報（組織）の位置は、通常、同一表現水準のなかにあるが、異なる表現水準に存在する場合もある。共起制限による情報の抑圧や、言語情報を言外の意味（言語外情報の一種）へと追いやっていくズームアウトの操作については、管見の限りではメンタルスペース理論でカバーできない。稿を改めて論じる。

Gilles Fauconnier 1994 *Mental Spaces*. Cambridge Press

（『メンタル・スペース』白水社。坂原茂・水光雅則・田窪行則・三藤博共訳）

5 不定人称者表現水準における意義素は静的体系を構成するが、その想起する現象素内の情報そのものが三項以上の成員によって静的体系をもっているとは限らない。「代名詞」のように参照点（言語外情報）へのアクセス機能や、「指示詞（こそあど）」のように言語（外）情報間の関係探索機能のみが静的体系に位置づけられている場合もある。その場合、具体的な意味内容はその都度「語義的優先情報」として、同等の或いは異なる表現水準に存在する言語（外）情報から選択されて取り込まれる。その取り込みは認知焦点や現象素焦点への言語（外）情報のズームインとは異なり、意義素が想起する現象素を拡大することはない。

本稿での「静的体系を構成する意義素／統合意義」は、関係性理論において「発話の論理形式にある概念アドレス」が「百科事典的記載事項・語彙的記載事項・論理的記載事項」という三種の情報へアクセスする「アクセスポイント」として機能するごとく、それ自体が慣習によ

って選択ずみの複数の意義特徴で構成されている。しかし、その使用された発話内で想起する情報スペースに取り込む情報は、言語情報でも言語外情報でもかまわない。

D.Sperber & D.Wilson (Second E.)1995.*Relevance* Blackwell (『関連性理論』内田聖二他訳, 研究社出版) 第二章推論の注釈 17

「我々は百科事典的記載事項の命題内容についてだけ考えてきたが、それが「イメージ」を含んだり、呼び出してはならないという理由はないし、いかなるタイプの心的対象物も概念的思考における情報源として使うことができるのである」(訳本 p349)

また、本稿における言語形式への情報取り入れ(ズームイン)先へアクセスする機能は、定延利之 2002における「認知者と環境のインタラクション」の図式に一部類似する。

定延利之 2001「情報のアクセスポイント」『言語』第 30 卷 13 号大修館書店 pp64-70

2002「インタラクションの文法に向けて—現代日本語の擬似エヴィデンシャル—

『京都大学言語学研究』第 21 号 pp147-185

ただし、本稿での取り入れ方法は表現水準ごとの言語行為者の能力によって異なるものであり、その差異の設定および考察については、インタラクションの文法でカバーできない。

6 文の意味と発話の意味(本稿の「叙述内容」と「伝達内容」)について、言語形式の構造としては違いがない(話し手の発声「文音調・強調イントネーション・対比ポーズ」は除く)にも関わらず、意味分析をするにあたって両者の区別をたてる必要があることは、ソーシャルがラングとパロールを区別したのちも、意義素論のみならず多くの学派で指摘されている。しかし、その両者で構成された文の意味を同一の手法で記述解釈する方法については、統一見解は定まっていない。その根本的障害は聞き手による判断・思考の扱い方にある。

本稿では発話者水準での発話群の結束が「一つの話題についてのコミュニケーションが一段落すること=伝達意図の消滅」を指すとし、そのコミュニケーションの流れを分析するにあたって、「聞き手の解釈」はとりあげない。本稿では、「聞き手の解釈行為は話し手の表現行為の変形であり原則的には同一の方法で分析できる」と考える。

なぜならば、一回きりの発話において、話し手の言葉を言語情報として取り入れたその瞬間から、聞き手は「<間接的な手段で得られる知識>(田久保・金水 2000)を構成する言語情報を反復、補正するために<内言internal speech>を話す話し手」へと変貌するからである。話し手の言葉は話されたその発話時点で聞き手にとっての「言語情報の提供者」となり、聞き手は常に「話し手による言語外情報取り入れの対象」としてのみコミュニケーションの流れのなかに存在する。すなわち本稿では、コミュニケーションにおいて「表現のプロセスと理解のプロセスを別次元に存在し、相互に影響しあう関係」にあるとはみなさない。この観点は人間の思考を、「言語として発話されない、言語情報と言語外情報とを自己中心的に統合する表現者の表現行為(=内言)」とみなすことと軌を一にしている。脳内における活性部位が表現時と理解時とで異なるのは、発話者と表現者との活動要件の差、またはズームインとズームアウト(具体化と抽象化)の情報操作の差、由来の異なる<談話資源>(坂原 2000)へのアクセス方法の差、などを反映していると考えられる。

田窪行則・金水敏 2000「複数の心的領域による談話管理」『認知言語学の発展』ひつじ書房

坂原茂 2000「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」『認知言語学の発展』ひつじ書房

7 この行為指示が結果としてその(発話)効果を発揮するかどうか、すなわち表現者の意図が実現するかどうか、という問いは、聞き手がどう意思決定するかによってはじめて回答が得られることであるため、本稿の言語表現の分析の対象からは除外される。

本稿の観点にたてば、発話効果とは、構文で表現された表現者の表現意図がそのまま話し手の伝達意図として情報化されたのち、聞き手すなわち第二の話し手によって談話情報として取り入れられて伝達意図へ反映され、その表現(言語情報でも言語外情報でも)のありかたと第一の話し手の伝達意図を比較することによって成否を判定されるものである。

8 「感嘆表現」は言語行為論における5つの言語内目的の一つに挙げられている。本稿でも、発話者水準で伝達意義を伝えることを目的とせず、みずからの慨嘆を口にして発話行為とすることで表現者が自足している「表現者水準に位置する表現意図の一つ」とする。感嘆を表現するための専用形式が存在するからである。

一方、言語形式としては統合型の位置が補填されないまま発話されても、発話場面の状況から話し手が感嘆しているという言語外情報が取り入れられる=話し手が聞き手に情報を伝え

るそぶりを見せない表現を、本稿では「感嘆発話」として、感嘆表現と区別する。

⁹ 日本語文法において叙述（ディクタムまたは埋め込み形式）から陳述（ムードまたは文）へ連続していく「表現形式の階層論（述語文を中心）」とその比較は、南 1993、益岡 2000 に整理されている。本稿は日本語の事例分析を考察するにあたり多くをその論考に負っている。

南不二男 1993『現代日本語文法の輪郭』大修館書店 pp21-62

益岡隆志 2000『日本語文法の諸相』くろしお出版 pp87-98

本稿で表現者水準に位置する構文特徴とする「感覚表出」の名称は、林四郎のたてた「描叙・判断・表出・伝達」南不二男のたてた「描叙・判断・提出・表出」の4段階の名称より借用している。ただし、定義は異なる。

¹⁰ “真的”「本当のこと」を構文内で連用修飾語として「本当に」の意味に用い、「聞き手にその言語情報（“你/他”を主語として表現された言語情報でもよい）が現実合致していると告知する、または確認をとる場合は、用いることができる。（日本語の「本当?」「本当だ。」）

¹¹ コード体系としての言語表現が、その形式を変えることなく実際の文として用いられる場合、日本語研究者時枝誠記は「ゼロ陳述が加わる」と解釈し、中国語研究者朱德熙は「言語構造の拡大方法が組織関係から実現関係へと変化する」という見解を示している。

¹² Daniel Vanderveken 1990 *Meaning and Speech Act* Voll. Cambridge Univ.Press

久保進監訳『意味と発話行為』ひつじ書房 1997 (pp102-105)

本稿では表現者水準における表現意図を、言語行為論学派における発話内目的に比定する。5つの発話内目的とは、言明、行為拘束、行為指示、宣言、感情表現である。

¹³ 関連性理論でも注釈つきで一定のコード化された「語彙的知識」を認めている。

¹⁴ 2項では「差異の認定」が可能になるのみで、3項で初めて体系が構成できる、と考える。

¹⁵ 意義素を構成する複数の意義特徴が、慣用語のなかで表現されなくなったり、他の形式との統合で一部だけが呼応可能として部分転用されることを、意義素論では「抑圧」と呼ぶ。

服部四郎 1964「言語の音声と意味」『英語基礎語彙の研究』1968 三省堂（再録）

国廣哲弥 1982『意味論の方法』大修館書店

ただし本稿では、表現水準が上位へいくほど情報量（下位の情報との共起制限がない情報）が増加することによって伝達意図に変種が生じることを認める。例えば“真快”の伝達意図を発話者水準で考察したとき、必ずしも感嘆（伝達意図を放棄、しかし制限はしていない）を表すとは限らず皮肉を表すかもしれないこと、などである。

¹⁶ 当該言語形式の意味以外の言語情報（文脈意義・共通体験など）や言語外情報を取り込む現象素枠や構文素枠は「完全には組織化されていない情報シンクタンク」であり、その構成にあたって現象素間では認知焦点や現象素焦点へのズームイン、構文素間については因果関係、出来事の順序などコネクタ情報による呼応連携が中心的役割を果たす。メンタルスペース理論におけるコネクタによるスペース間の連繋と転移は特定の言語形式の意味転移現象を分析するものであるが、本稿でいうコネクタは文と文とを繋ぎ、一連のテキスト（構文素枠を想起させる）を成立させていく認識論的特徴（ただし言語情報化可能）を指す名称とする。その特徴には<表現意図>の間の共通点が弁別的要素として必ず含まれる。

田窪・金水 2000（注6既出）が定義づけた「心的領域」と多くの共通点を有する。

「本論文の目的はメンタルスペース理論を対話的談話に拡張して、動的な談話理論を構成することである。ここで仮定されている対話モデルでは、発話は心理条件ではなく、対話者の記憶データの更新指令として解釈される。」(p251)

¹⁷ 芳賀綏 1954「陳述とは何もの?」『日本の言語学・文法 I』大修館書店 1985 再録

益岡隆志 1991『モダリティの文法』くろしお出版

¹⁸ 大滝 1979（本文 p7）では上昇音調と下降音調の他に「a 音調（上昇）（下降）」を認めた。

大滝幸子 1980「中国語語気詞の意味記述（その2）」『中国語学』No227、

さらに、語気詞 ba, ma は文音調の上昇下降と重なり、na は a 音調の上昇下降と重なるとして区別した。通常文音調と a 音調の示差的特徴は、上昇では「不安定」対「反駁」、下降では「平叙」対「慨嘆」である。感動文に a 音調がよく出現することは、中国語に二つの文末音調があることの裏づけの一つである。

¹⁹ 袁毓林 1993（本文 p9）、荒川清秀 1979（本文 p10）などが指摘している。

- 20 大滝幸子 1975 「中国語形容詞の意味記述」『中国語学 222』中国語学会 pp17-35
 意義素記述の作業仮説として、意義素を単に「語義特徴の束」とするのではなく、内部構造として関連性のある「意味的事項」とたてて事項ごとに語義特徴を記述した。
- 21 国広哲弥 1882 『意味論の方法』大修館書店 pp67-71
 意義素内の語義特徴の種別の一つとして「品詞的特徴」をたてている。ただし、「動詞」とだけの記述でも可とし、名詞との統合関係を基準に判定するものであり、意味的特徴を指摘してはいない。本稿では原則として意味的事項の選択と配列を品詞判定基準に用いる。
- 22 Grice.H.P 1975. *Logic and conversation. Syntax and semantics3* Academic, NewYork
 協調の原則 (Cooperative Principle) と 4 つの会話の行動指針「量・質・関係・様式」をたてる。含意 (implicature) が生み出される過程とそれを推論 (inference) する聞き手の行動について述べている。以下の解説書はその誤解されやすい論点を指摘している。
 Jenny Thomas 1995 *Meaning in Interaction* Longman
 (浅羽亮一監修『語用論入門』研究社 1998) p68
 「グライスは協調の原則を命令形で表現しているが、そのために読者はうっかりすると、グライスが何か行動規範のようなものを示していると思ってしまう。グライスが示したかったのは、人と人との間の会話は、一定の規則性が(特にそれに反することが示されない限り)維持されているという了解のもとに行われるということである。私たちは生活のどんな側面においても、常に共通の了解事項に基づいて行動する。」
- 23 大滝幸子 1996 「時間と距離に関する中国語形容詞の意味分析」『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第1輯 pp1-36
- 24 計量形容詞の定義は以下の論文による。AaとAbという計量形容詞の記号は、判断スケールの数値が増加していく方向にある属性と減少していく方向にある属性の区別を示す。
 陸俊明 1989 「説量度形容詞」『語言教学与研究』第3期 pp46-58
- 25 性質形容詞に程度副詞が前置されることによって文終止が可能になることを、「個体から程度への関数」として性質形容詞を捉えることによって説明した論考がある。
 伊藤さとみ 2005 『現代中国に見られる単数/複数/質量の概念』好文出版 pp102-106
- 26 大滝幸子 1996 「判断形容詞と動詞とが組み合わさった統合型の統合意義特徴の分析」『東洋文化研究所紀要』第131冊 pp117-181
 計量形容詞の意義素内に含まれる意味的事項として判断対象・判断基準・判断結果をたてた。しかし現象素内に登録されるべき言語情報は判断方法である「判断スケール」と判断結果(「リトマス形式=“很”」で固定される判断スケールの意味)である。あとの二つの意味的事項に関する情報は認知焦点と現象素焦点へ、主語の位置の言語形式と言語文脈からズームインされた情報である。
- 27 本稿では表現水準ごとにそれぞれ発話時点と叙述時点と出来事時点とを区別する。
 この区別はライヘンバッハがたてた発話の現在時 (speech time)、基準時 (reference time)、事件の時点 (event time) と同様の規定をもつ。
 Reichenbach, Hans 1947. *Elements of Symbolic Logic* The Free Press
 (『記号論理学の原理』1982 石本新訳大修館書店)
- 28 久野暉 1978 『談話の文法』大修館書店、第1章省略
- 29 このような一つの意義素内の語義的特徴が統合相手となる形式との語義呼応によって、活性化されたり抑圧されたりするメカニズムに一貫制のある説明を与えるためには、状況を現象素枠スペースとして囲いこむときの枠構成原則を認識論の立場から、発話の完成に向けて「その表現水準において何を言語化する必要があるのか」を追求する必要があると考えられる。稿を改めて論じることとする。管見の限りでは中国語動詞のコトの過程について最も精緻な分類は郭 1993 であり
- 30 アスペクトとの関連で中国語動詞分類をたてた先行論文のうち、管見の限りでは郭 1993 がもっとも精緻であり、6個の基準に基づいて5大類10小類をたてている。
 郭鋭 1993 「汉语动词的过程结构」『中国語文』第6期 pp410-419
 なお、本稿では命令表現と関わりのあるシンプルな基準で分類した。
- 31 大滝幸子 1990 「中国語離合詞が提起する文法問題 (その1)」『明海大学外国語学部論集』第3集 pp91-100

“好”“完”がどの動詞の結果補語になるかを調査した結果、“好”のほうにより厳しい共起制限が課せられていた。その原因は、“好”と共起するためには「明確な目的をもつ動作行為」だという弁別的特徴が必要だということである。

³² 大滝幸子 2005b 「中国語命令表現内における文法構造の役割分担 (その1)」

金沢大学文学部論集言語・文学篇第25号 pp1-24

方向動詞が方向補語“来/去”をつけてはじめて命令文になる例を指摘した。方向動詞はGoalを必要とし、“来/去”によって「発話場面(話し手の存在地点)からの視点」とコネクトすることにより、命令文としての発話場面での効力を発揮すると考える。同様の言語事実は本文(p20)の“走过来”にも認められる。

³³ 「アクツィオンサルト、アスペクト、アスペクチュアリティ」の定義は、工藤1995による。

工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房 pp31-36

³⁴ 管見の限りでは認知科学の分野で時間と記憶を結びつけた実験データが見出せなかったが、今後も探索を続けていく。

³⁵ 「サピア・ウォーフの仮説」として、すでに一つのテーゼとなっている。

³⁶ 伊藤さとみ(注24既出)

中国語における裸名詞を「類名を表し、質量名詞的外延を持つ」p34と定義する。

本稿では伊藤の指摘している「可算化措置(数量詞、指示詞の付加など)を経ない裸名詞」を目的語位置に置き、かつアスペクト助詞を含まない述語目的語統合型は、述語動詞の動作を「非一回性の事柄」として表現するとする。本稿では「事柄」という行為概念を時間上の一定位置をもたず、超時的行為としてある。

³⁷ 服部四郎「意義素の構造と機能」『言語研究』第45号, 言語学会

³⁸ (注20)参照

³⁹ 渡辺実 1995「所と時の指定に関わる語の幾つか」『国語学181』国語学会 pp18-29

本稿の言葉で言い換えるならば、観察者としての時間と体験者としての時間を区別して表現する形式を日本語のなかに見出した論考とみなせる。